
カタストロフィー

如月ゆいな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カタストロフィー

【Nコード】

N6241D

【作者名】

如月ゆいな

【あらすじ】

僕は、猫を拾った。カタストロフィーとは愛と憎しみが併存する状態を示します。

―今日は絶好の自殺日和―

窓に切り抜かれた四角のソラは、絵の具をその儘、カンバスに零した様な碧さを見せ付け、千切れ千切れに浮かぶ乳白色の雲、其れはグイド・レーニの絵から抜け出た天使達が悪戯に、此の世界の非情の何たるかを、声も高らかに歌っているかの様でした。

森羅万象を燃やし続ける太陽が放つ熱を帯びた光が十二分に、決して大きくもない窓から室内へと差し込んで、其れの輪郭を浮き彫りにしています。

未だ寝具の上で夢枕に就く彼にも一例外は無く。

彼は光から逃げようと、幾度か頭の位置を変えたり、寝返りを打ったりして、少しでも長く眠りに居ようと試みはしたものの、結局其れは無駄骨に終わり、諦めを悟った男は情けない声を出しながら其の半身を起こします。

寝惚気眼に眩しさが浸み入って、僕は念入りに両目を擦ると、丁度ベッドの横、枕元の隣に意図して置かれたテーブルの上のグラスを一目を細めた儘一手に取った。

グラスには半分程の水が入っておりまして、僕はゆっくりと縁に口を付けるや否や、一気に其れを飲み干しました。神経質に見える程丁寧に、グラスを元の位置に収めると、一刹那の沈黙の後、小さく溜息を吐きます。気怠く再び手を延ばし、煙草の箱を取り上げ、ライターで火を点けると、オイルと煙草の煙の香りが次第に辺りに広がっていき、煙を口から吐き出すと、今回は刹那的で無く一沈黙は

続いた。

煙草の葉が燃えるジリジリとした音、不規則的な周期で煙を吐き出す音：不意にテーブルの上に散らばったPTP包装が乾いた音を立てた。何種かの薬。アルミから押し出され、空になっているものは、彼が昨晚寝具に身を預ける前に服用したもののなのでしょう。

煙草を灰皿に乱雑に押し付け、彼は何かを思い立ち腰を上げました。

部屋の隅には幾つかのキャンバスが立て掛けられており、その一つを彼は手に取る。其処には女性の姿がデッサンの状態で描かれておりました。いや、描こうとされていた。

「女性」と云うのも大方の予想で、大部分の線が消されていたり、表情が無かったりした儘キャンバス上で時を止めているのです。

2

「一書けない。

リアルを追求する程、僕のココロは苦しくなる。」

僕の呼吸は荒くなり、肩で息をする様に震え始めました。

意識的ではなく、必然的に。

顔面はみるみる内に蒼白な色合いを呈し、両手の震えからカンバスを床に落としました。

足は、一身長からすると随分軽目ではあるが一僕の体重を支える事も儘ならなくなり、倒れ込む以外に方法は無かったのです。藻掻きながらも寝具まで辿り着くと、腕を伸ばしリスパダールの内用液を掴む。切り口を歯で噛み千切り、1mLの液体を口に含むと瞬時に広がる強烈な苦み。その様な苦みも、僕は日常的に耐性が付いているので何かで流し込む事も無く、其の儘横になりました。

響き渡る荒々しい呼吸の音に耳を傾けながら、手足、それに顔面に迄及ぶ痺れを必死に堪えます。朦朧と、弱々しく開いた瞳が捉えた窓には、相変わらずサックスブルーの中を泳ぐ天使達が、僕を嘲笑っているのです。

一いつの間に眠りに落ちていたものでしょう、ふと気付けば窓から一杯に射し込んでいた朝日は薄れ、ソラは高くなっていました。

まだ朦朧とする意識を覚醒させるべく僕は冷水一杯で顔を洗い、鏡を覗き込む。

真っ黒な髪、其れは少し長く、横に流さなければ前髪は目の際に届きそうです。

色白な肌と、はっきりとした二重はきつと母親譲りなのでしょう。

上唇は薄く、下唇は比較的厚い。此れは――僕はタオルで顔を拭いた後、出掛けるべく、着ていた部屋着を脱ぎ捨て、簡素ながらも小綺麗な服に着替えます。財布と、煙草、それに使い込んだあるスケッチブックとデッサン用に芯を長く出された鉛筆を携えて。

「あら、お出掛け？」

調度アパートを出ると、苗木に水を蒔く大家が僕に問い掛けました。

「ええ、少し創作に行き詰まってしまったもので…」

僕は軽くそう答えると、大家は手を休める事無く、こちらをじっと凝視し、少し怪訝な表情で続けました。た

「そう、其れは大変ね。良いモノが描ける様に願っているわ。」

さて、僕は独断行く場所等定めてはいませんでした。少し歩いた場所にカフェを見付けましたので温かい珈琲を頼み、通りを眺める事の出来る場所に腰を定めました。

季節は春と云えど、時折吹く風は多少ですが肌寒く感じられます。

春は世間が浮き立つ季節ですが、僕は好きではありません。

母がいえ、母に捨てられた時期であるからです。

其れは僕が4歳の時でした。

父は居ません。

いえ——分かりません。

母からは何も聞かされてはおらず、4歳迄は母と暮らしておりましたが、以降は施設で生活しました。

18歳で施設を後にし、以来は知らない男性の名前から毎月一僕には多額だと感じる程の一金銭が振り込まれています。

浅学菲才な僕でも、其の名前の男性こそが、僕の父であると予測は出来ています。

しかし、認めたくないのです、いえ、胸糞悪いのです。

僕は彼を知らない、けれど彼は僕を知っている。毎月金銭を送ると云う事は認知はしているのでしょうか。僕が自分の子供であると。でも僕は認めたくない。顔も知らなければ声も、どの様な人物である

かも認識出来なすし、『父親』の種に因って僕の命が形成された、と云われましてもピンと来ないのです。父親であるなら、何故あの時――

僕は取り留めの無い、非生産的思考を巡らせながら、通りを過ぎ行く人々を眺めて居ました。絵描き、として、人物を見て思う事は、決して俗人の思う

「可愛い」であるとか

「綺麗」で在るとかでは無く、専ら

「顔と軀のバランスが良い」だとか

「脚のフォルムが美しい」と云った事であります。

しばらくカフェにて行き交う人物を眺めておりましたが僕の創作に適した材は見付ける事が出来ず、僕はすっかり冷めた珈琲を半分程残し、店を出ました。

「さて、どうしたものか。」

僕は通りを歩きながら次に行くべく場所を脳内で模索しました。春風駘蕩、時折の風を除けば。此処は決して田舎では無い街であるので、擦れ違う人は多く、また歩調の遅い僕を追い抜いて足速に去って行く人も居ます。

人混みに酔い易い僕は、しばらくすると眩暈を催し、全身の血の気が引くのが分かりました。

人通りの多い通りと云えど、一步裏の通りに入れば格段に人は少なくなります。

僕はそちらへ歩行を変え、何処か休める場所が無いものか、周囲を見渡しました。

すると視力の比較的弱い僕にでも確認出来る場所に一通りの向側ではありますが一広場が見受けられました。

ゆっくり、確と大地を踏み締める様に神経を尖らせて広場へやつの思いで辿り着くと、青いペンキを塗られた粗末なベンチに腰を据えました。

粗末で簡易的なベンチであつても今の僕には充分なのです。吐息が荒くなり、例の発作が始まる兆候を見せると同時にヒルナミン、ルボックスの錠剤を唾液で飲み込み、今朝も服用したリスパダール内用液を流し込みました。効能が現れる間に煙草に火を付け、大きく吸い込み、口を尖らせた状態で吐き出します。

人混みはどうにも好きになれず、しばしば発作を起こす事があるのです。まるで僕に対する罵意雑言を行き交う人々が囁いている様です。

「エロイ、エロイ、レマサバクタニ」：そんなフレーズが頭に浮かびました。神は人に命を与えるけれど、人類救済の為に世に遣わされたキリストは、最後に嘆くのです。

「神よ、神よ、何故お見捨てになられたのですか」一礫にされた際、彼は信仰を否認する人々の事を

「神よ、お許し下さい。彼等は自分が何をしているか知らないのです」一最期はキリスト本人も死を怖れたのでしょうか。僕は一死は怖くない。でも勇気が無いから能々と生き存えているだけで在って、死、と云うより『消滅』であるなら、僕は其れを望んでいます。

そう考えているうちに何時の間にか晴れ渡って居た筈の空からは小雨が降り、すっかり辺りも薄暗くなっていました。

僕はようやく落ち着いて来た発作をまだ心配しつつも重い腰を上げ、帰路に着く事にしました。

雨は次第に激しさを増し、春の冷たさを含んだ雨粒は容赦無く街を、僕を打ち付けます。雨具を携えて等いなかった僕は帰路を急ぎ、来た道を多少急ぎ足で辿りました。

随分と家に近付いた頃、電柱の影に何かを見付けました。

猫、にしては幾分大きく、其れにゴミにしてはあまりに人型をしているのですが、何分雨と、暗くなってきた所為で、遠目からは其れが何で在るのか判別が付きません。此処の通りは、普段なら付近に住まう人々が疎らですが、穏やかに行き交う道ありますが、雨の所為でしょうか、僕以外に人は見受けられません。

僕の歩みは、次第に其の猫で在るかゴミで在るか、に近付きます。そして其れが人間の女性で在る事に気付く迄、そう時間は掛かりませんでした。

顔は伏せて居るものの、体格からすれば、まだ少女、なのでしょう。春雨はまだ冷たいと云うのに、真っ白いワンピース一枚を身に纏い、雨に打たれて、彼女は一体其処で何を一近付いてみて驚きました。濡れたアスファルトに据えて居るのは、素足なのです。その格好から推測するに、家出をしてきたか一其れくらいしか考察は及びませんでした。しかし通りには僕、と彼女のみ。放って立ち去る程僕は冷酷非道な人間では無いので片言隻語、

「どうかされたのですか？」

とだけ掛けてみました。ようやく顔を上げた彼女。真っ黒い瞳、同じく真っ黒い胸下までの髪、唇は寒い所為か僅かに紫を帯び、その口からは何を発する訳でも無いのですが、瞳はジッと見開きこちらを凝視していたので、僕は次の言葉に詰まってしまいました。

「あ、あの。風邪ひいてしまいますよ」

やっとの思いで絞り出した言葉にも彼女は沈黙を守り、相変わらずこちらを眺めているのでした。いよいよ困惑した僕は一其の場合から立ち去る事も勿論出来たのですが、何故か其の時には其の様な考えは浮かばなかったのです。一種の賭に出てみる事にしました。そして発した言葉は此の様なものでした。

「髪も、服も濡れた俣では風邪をひいてしまいますので、私の家も近い事ですし、乾かして行かれては如何がですか？雨宿りも兼ねて」さて、彼女の反応はと云いますと一やはり押し黙っては居るのですが一僕は手を彼女に差し延べた所、一刹那於いて、彼女は手を伸べてきたのです。此れには言動を放った僕と云えど、少し驚きました。と云うのも、押し黙った俣、無視を貫かれると云うのが落ちである。と心の中では思っていたものですから。

僕は彼女の手を取ると彼女はスッと立ち上がりました。背丈は調度僕の肩辺りでしょうか。雨に困って濡れたワンピースがへばり付き、

彼女の躰のラインを浮かび上がらせていました。多少眼の遣り場に困ったものの、其れは思わず見とれてしまう程妖艶でありましたが、背丈から考えれば細過ぎるものでした。沈思黙考は、それ程長くは無かった筈です。

僕は彼女の手を引き、家の在る方向へと、彼女の歩幅に合わせながらゆっくりと歩き始めました。

僕の部屋は単身で暮らすには比較的広目である様に思います。寝室と、リビング、キッチン、其れとセパレートのトイレと風呂。

部屋に戻り、とりあえず僕は彼女に髪を乾かす様に言い、適当に着れそうな服を手渡しました。何分か、何十分かしてリビングに現れた彼女は、髪もすっかり乾いており、先程の僕の思い通り、躰のバランスは良く、顔も整って居りました。大きい黒目、開かれた目を縁取る長い睫毛、スツと通った鼻筋、女性らしく、ふっくらとした唇。

適当に腰掛けて居て下さい、そう告げると僕はキッチンへと赴いて湯を沸かし、珈琲を入れました。

「珈琲、で大丈夫でした？」

彼女はゆっくり両手でカップを包み込む様に持ち、縁に口を付け、音を立てる事も無く一口、二口、と飲みました。其の姿を見て僕は安心しました。怪しい者である、とは思われていない様なので。

カップを両手で包んだ俣膝の上に乗せる様に置いたのを確認すると、僕は問い掛けました。

「あ：家出か何か、ですか？」

：又彼女はこちらを眺めた俣硬直しました。

「すみません、言いたく無かったら良いのですが、あの様な場所で雨に打たれて居た、のは余程何かが有ったのかと…」

彼女は俯いてしまった。横からの視点なので、少し悲しみを含んだ様な瞳が僕の目を引きました。また謝罪すると、やっと彼女は顔を上げてくれ、何か言いた気に口の形を変えますが、それでもやはり其の口から音は出ないのでありました。

沈黙の間、僕の脳裏には、もしかすると彼女は艱難辛苦な出来事に因って、心理的打撃を受けているのでは、と憶測に過ぎないのですが一そんな事を思ったので、こんな事を言ってみました。

「何か気が咎む様な事があるなら、気の楽になる迄此処に居て良いですよ。此処は僕一人で、父も母も一居ませんから」

普通なら何かしらの懷疑の念は持つでしょうが、彼女はこちらを凝視した後、一僕の気の所為かもしれませんが一少しだけ、僅かに少しだけ、口元が綻んだ様な気がしたのです。

彼女はまるで其の黒い大きな瞳で一僕の心の内迄見透かしている様でした。

「僕の寝室、で良ければお使いになって下さい。」

時計が九時を回って居たので僕は彼女にそう提案致しました。

彼女も何やら訳有り気だと憶測し、早目に横になった方が楽であると思ったからです。

一もつとも何を問うても会話が成立しないので、詳細は明日にしようと考えた末の事でもあります。一彼女が一刹那の後、飲み干した珈琲のカップを両手でテーブルに据えたのを見届けると、僕は立ち上がり、彼女を寝室まで案内致しました。彼女は素直に僕の後ろを着いて参りました。寝室へ入ると彼女はベッドへ腰を下ろしたので、電気を消す事を告げ寝室を後にしました。

さてリビングに戻った僕は此の曖昧模煳な状況を整理すべく考えを巡らせました。

まだ名前すら知らない彼女は一体何故あの場に居たのか、何故質問何にも口を割ろうとしないのか。

其れは実に非生産的な考察であります。しかし、気にし始めると留まる事を知らないのが僕の悪い癖でありまして。彼女の黒い瞳の奥に一体何が潜在するのか一散々あれや此れやで自問自答した後、夜も更けて来ましたので僕は眠ろうとキッチンにてグラスに水を注ぎ、ロヒプノール、セロクエル等眠剤の類を其の水で流し込みました。全ては明日分かる事、そう自分に言い聞かせソファに身を委ねたのであります。次第に体は重たく感じる様になり、思考も霧が架かった様ボンヤリしてきたので、再び何か考える事の無い様、僕は頭一切を無にして只薬の力に依存するのです。

『やめて!! やめてよママ!! いたいよ、いいこにするから!! たたかないで!!』

『何て可愛く無い子なの。』

『ママごめんなさい!! ごめんなさい!! いたいよ...』

『アンタなんて産まなければ良かった!!』

『おねがい!! ぼくをおいていかないで!!』

目を開くのが先か、上半身を擡げるのが先か、そう叫んでおりました。

危うくソファから此の躰が転げそうになり、躰からは不快な汗が出ておりました、其の事で先程の出来事が夢であったのだと認識する事が出来ました。数え切れない程見た夢、数え切れない程叫んだ言葉、数え切れない程吐き捨てられた母の言葉――肩で息を促しながら、ふと横際に目を遣ると何時から其処に居たのでしょうか、寝室から抜け出た彼女が心配そうに、はたまた不思議そうに首を傾けてこちらを見つめていました。

「あ：大丈夫、です。」

呼吸荒くそう僕は呟き、即座に立ち上がり寝室へと向かうと、ベッド脇のテーブルからリスパダール内用液を取り上げ、其の場で包装を噛み千切り、中身を吸いました。

何度見続けるのだろう、まるで僕のココロはあの時の俤、阿鼻叫喚を続けながら、時を止めてしまった様なのです。振り上げられる手、蹴り上げられる脚、幼い僕は吐き捨てられる罵意雑言から必死に耳

を塞ぎ、されるが俛、無抵抗に此の軀を文字の示す通り七顛八倒せざるを得なかったのです。4歳迄の記憶、母との記憶。僕を産んだ母との記憶一。

氣息庵庵だった僕は、しばしベッドに腰を下ろしながら呼吸を整え、薬の効いてくるのを待ちました。

人様に弱みを見せるのが怖いのです。

常に完璧で居なければ、きっと落胆され、見捨てられる恐怖に駆られます。

つい昨日出逢った彼女ですら其れは例外で無く一もう誰からにも見捨てられたくないのです。

何分かして効能が顕れ、少し楽になった後、リビングへ戻ると彼女は相変わらずソファの横際に居り、膝を抱えた状態で寢室の扉を静かに閉める僕の方へと顔を向けておりました。

どうしたの、とも言わんばかりの其の表情に、先程述べた類の様な自己嫌悪すら覚えました。覆水盆に返らずとも云うべきでしょうか、完全に先程の僕の奇妙な行為が彼女には決して理解出来るものではなく、むしろ敬遠されるべく不可解なもので有ったのが手に取る様に感じられたので、完全に意気阻喪させた僕は、とにもかくにも一人になりたくて、気を動転させながらも

「行きたい所が有れば勝手に出て良いですから」

と冷酷に彼女に言い放った後、転げる様に家を飛び出したのであります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6241d/>

カタストロフィー

2010年12月26日14時29分発行